

〈ブレース①の 3 案についての委員の意見〉

委員（い） B 案：庭がよく見えた方がよい。

委員（ろ） B 案：現在の千里庵の庭園側の開口部は、屋内から庭園全体を見渡せるように全面を開放としている。元の設計に合わせ、現況保存の観点から開口させた案を選択。

委員（は） B 案：視界が遮られないのが良い。

委員（に） B 案が良いと思われるが、各案それぞれにメリットデメリットがある。ほかの委員の意見を聞いたうえで最終的に判断したい。

・ 質疑

【全体】

委) 設計当初の設計意図に関する資料はないか。

府) 設計図面はあるが、意図に関わる資料は残っていない。

【ブレース①】

委) 千里庵のピロティ部分の利用状況はどのようなものか。千里庵の中には厨房もあるようだが、そこで調理したものなどがふるまわれたりするのか。

府) かつてはここでお茶がふるまわれていたが、現在は行っていない。今後ここで呈茶などしてくれる業者があれば提供していきたいと考えている。

委) 伝統的建築等を模して造られている形跡がある。ピロティ部分の端の一角は待合のように見える。B 案のブレースは開口させているものの、形状が特殊で目につきやすい欠点もある。景色に溶け込ませようとするのであれば、いっそ壁で覆ってしまうのも一つの案ではないか。待合であると仮定した場合、景色が遮られ囲まれた空間となる方が違和感がない。

府) B 案については、元の設計を生かし、開口部を広くとる方がいいのではないかという考えから作った。なお、ここを壁で覆ってしまうと、ピロティ部分の庭園側が 3 分の 1 ほど閉鎖されてしまうため、入ってくる光の量も減り、かなり暗くなる。庭園側の開口部は、部屋及びピロティ部分から枯山水の庭全体を見渡せるよう開放されている。(特にピロティ部分からの景色の幅が狭くなってしまうことを重く見ることとし、B 案が妥当と思う旨ご意見いただく)

委) A、B、C の順で金額的に高くなるのか。

府) そうなるが、A と B の差は大きくはない。数十万円程度で、全体工事費の 1 %程度。

委) C 案なら、丸窓や三角形にする方がデザイン的に良いのではないか。あまり必要性は高くなさそうだが。

府) 壁を入れると枯山水庭園に面した解放部分のおよそ 3 分の 1 が閉鎖され、既存の左側の壁の影響もあってピロティに入ってくる光の量が少なくなり、薄暗くなってしまうことが懸念される。

委) 枯山水の庭園内には園路はないのか。ないのであれば、庭園からの景観は考慮の必要はないと考えてよいか。

府) 園路はない。

委) それであれば、ピロティ側からの開放性を重視するほうが良いのか。

府) こちらの椅子とテーブルは、来園者が座ってお弁当を食べるといった使われ方をしている。

委) A 案だとクロス部分が視線の中央にくる。B 案の鋼材がもっと細くできればいいのだが。あとは、座った時に上の W が視野の邪魔にならなければいいと思う。B 案は（庭園側の）開口部が一番大きくとれることが利点か。

委) B 案は庭を見るときに視界を遮られない。A 案はブレースのクロス部分が銘木に重なるのが良くない。C 案は視界が遮られてしまうので今一つ。

A 案、B 案以外のブレースの形状は可能か？

府) 他にも複数案検討したが、構造計算上、この 2 案となる。

【ブレース⑤ ピロティと屋内の間の壁】

委) トイレのブースが 10cm 狭くなることは問題ないか。

府) もともとゆったり作られているため、10cm 狭くなっても一般的な個室トイレ並みの広さは確保される。

【ブレース③ 逆 V 型】

委) 吊り格子の意味は？

府) 建築意図は不明だが、千里庵内部の茶室の天井にも同じような吊り格子が設置されている。また、千里庵は禅宗の方丈を象って作られたとされており、京都の禅宗のお寺などにある方丈庭園が見える部屋に格子状の天井が備わっていたりするので、そうした様式を模しているのかもしれない。

委) 天井の吊り格子は吊ってあるだけか。地震で揺れたりした場合、ブレースに当たると壊れるのでは。

府) 吊り格子といっても H 鋼などにしっかり取り付けてあるため、揺れるようなことはない。

【ブレース⑥ 調理室の壁】

委) 勝手口は斜路の方に面して開くことになるのか。勝手口に行く通路入り口に門があったと思うが取り壊すのか。

府) そのまま置いておくことになる。

委) 階段を撤去した後は植栽する？

府) 現況の通路と同等の仕上げになる予定。砂利敷きなど。

委) 斜路を上がると遠回りになる。

府) 手押し車が使えるので荷物などは運びやすくなる。

【本審議の結論】

以上より、ブレース①については B 案 を採用する。

（ブレース②から⑥については事務局案に対して反対意見なし。）